

本部だより

●第 29 号



マーシャル方面遺族会

<http://mibfa1926.com>



携帯サト

●環礁・本部だより第 29 号●発行日:平成 26 年 2 月 1 日●発行人:黒川誠
●マーシャル方面遺族会本部:〒142-0051 東京都品川区平塚 3-4-17
●電話 03-3783-8382 ●FAX03-6410-4420 ●振替番号 00100-0-93487



●「一富士二鷹三茄」は初夢に見ると縁起が良いとされる。富士山は昨年「世界遺産」に認定された。

謹賀新年

篤志会員
徳原徳子

監査役
内海淑子

岡野智津子

晝間志津子

草場寛

山口良二

高林芳夫

幹事

黒川 誠

会長

大給湛子

相談役

本部役員及び篤志会員

平成二十六年





平成 26 年度

慰霊祭・総会・直会のご案内

会長 黒川 誠



会員、会友の皆様には、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年の慰霊祭・総会・直会を次の通り開催致します。皆様お誘い合わせの上、ご参加くださいますよう、お待ちしております。

■定期総会

慰霊祭終了後、「靖国会館」前にて記念撮影を行います。その後、同館2階「田安の間」にて正午より開催致します。

■直会（なおりい）

定期総会終了後、その場所が会場となります。閉会は午後3時頃を予定。

●お願い

◇同封の出欠はがきには、欠席の方も各項目にご記入の上、2月末日まで本部に届くようにご投函ください。

◇本会への年会費（3000円）、寄付金、直会費（一名4500円）、玉串料（一名500円）は、同封の郵便振替用紙にて2月末日までにお送りください。

●宿泊の方へ

◇九段会館は閉鎖されております。次のホテルは靖国神社にも近く、ご推薦致します。ご自身で早めにご予約ください。「ホテル・ヴィラフォンテーヌ」

住所 〒101-0065

東京都千代田区西神田2の4

☎ 03-3222-8880

「総合予約センター」

03-5339-1200

「インターネット予約」

<http://www.hvt.jp>

平成25年度・マーシャル方面遺族会

永代神楽祭（命日祭）斎行

本会の永代神楽祭は、例年通り7月15

日、靖国神社「みたままつり第二日祭」と同日に行われました。写真（次ページ）のように毎年お馴染みの方々の出席を戴きました。参集殿では坂明夫祭務部長さんのご紹介で徳川康久神宮司にご挨拶を

することが出来ました。

境内では星野綾子さん（東京都）の「みたま祭献詠入選句」が展示されました（写真12ページ）。

この記念すべきイベントを見られるように体調を維持して頑張ってみませんか？

■慰霊祭

日時 平成26年4月5日（土）

受付 靖国神社・参集殿前テント内・

午前9時より開始致します。

必ず受付にて出席者名簿とご照合の上、参集殿にお集まりください。

当日ご参加の皆様は参加票にご記入戴き、領収書（一名・500円）をお受け取りください。

慰霊祭 午前10時（ご本殿）

星野綾子さんの「秋季」入選句
米櫃に好きな銘柄八月来



「永代神楽祭」出席者（参集殿）

全国戦没者追悼式に参列して
黒川誠

8月15日、連日の厳しい残暑の中、今年も天皇皇后両陛下のご臨席のもとで追悼式が日本武道館で開催されました。会場の正面祭壇には菊花に飾られた中央には、墨痕鮮やかに「全国戦没者追悼式」と書かれた追悼柱が、祭壇の要と建てら



徳川康久神宮司（左）と名刺交換をする黒川会長

れています。陛下のお言葉、ご退場の後、政府高官、各党代表、外国大使公使の献花があり、各都道府県より代表者の献花となります。

今年には東京都の代表で私も献花致しました。選ばれた遺族は殆どが高齢者ばかりです。祭壇に向かうには勾配のあるところを歩いて昇るのですが、下りはとても恐怖を感じました。

追悼式は私達遺族にはありがたいことですが、戦争さえなければ最愛の父、兄弟を失うことはなかったと悔やまれます。平和に対する努力と信念を忘れてはなりません。

東京都戦没者追悼式

終戦から68年を迎えた8月15日、都戦没者追悼式が文京シビックホールであり、昨年より約80人少ない約610人の遺族らが参列しました。

猪瀬直樹都知事は、「当たり前のようには享受している平和と繁栄は、多くの方の犠牲の上に築かれている事実を決して忘れてはならない」と式辞を述べました。

平成 12 年 10 月 16 日マジュロ空港にて、同行の高林芳夫さん撮影



山村要さん（中央）と黒川誠会長（左）、佐竹エスさん（右・故人）

井上賀雄

（東京都）

昨年6月、当遺族会の篤志会員であった山村要さんの訃報に接しました。94歳だったそうです。

昭和19年（1944年）2月6日、私たちの父、兄弟、親族たちがマーシャル諸島における戦闘で玉砕したのは今から70年前。当時、山村要さんは24歳だったと思います。多分山村さんは日本の南洋統治時代、日米戦争、米軍軍事施設、そして戦後の日本の様子などを目の当りに

されたのではないかと推察します。

終戦後しばらくして上京した私は、毎年父の命日には、靖国神社に参拝していましたが、昭和38年（1963年）「クエゼリン島戦没者遺族会」（今のマーシャル方面遺族会）が有ることを知り直ぐ入会しました。

当時、マーシャルの首都マジュロに住されていたと思われる山村さんには、当遺族会に何かとご協力をいただいていたと思われませんが、遺族の熱意が通じて今日のような立派な「マーシャル方面遺族会」が存続しているのです。

昭和42年（1967年）4月、当遺族会の浮田常任幹事（後・会長）と、佐竹幹事（後・常任幹事）が、マーシャル諸島の事情調査、収骨、慰霊のため、船で横浜を出航—大任を果たされ、10月に帰国されました。遠い日本から様子が全く分からない南洋の珊瑚環礁の島々に向いた浮田さんたち二人・・・その後、当遺族会は「現地慰霊碑」を元日本軍の司令部があったクエゼリン本島に、米軍及び関係方面の了解を得て、建立しました。当時48歳だった山村さんにもいろいろと

お世話になったものと思われれます。

現地慰霊碑設置のお陰で昭和50年（1975年）8月、長年の念願だった現地慰霊参拝が実現したのです。ただし肝心の慰霊碑を設置したクエゼリン島上陸は米軍の重要軍事施設があるため許可されないとのこと（しかし実際は、帰途飛行機給油の短時間に限って、米軍の厚意で遺族の現地慰霊碑参拝が認可されました）。

渡航手続などは日本交通公社（今のJT B）に依頼しましたが、さすがの交通公社も現地が不案内（当時は日本政府としても未だ現地との国交がない状況）、またホテルの様子もはっきりせず私たちは場合によっては野宿も辞せずの思いで、羽田からハワイ経由で出発しました。やはりマジュロのホテルは部屋数が足りず、屋根裏部屋に宿泊した人もいたようです。

マジュロ島では、山村ご夫妻の尽力もあり予告無しに我々慰霊団一行全員を晩餐会に招待してくれました。急遽我々遺族は返礼として翌日、各自持参したものを出し合い日本からのお土産として、島

民の皆さまを親善パーティに招待しました。双方の友好親善を深めることができた。良かったと思います。

その際、私は日本語がとても上手な山村さんに初めてお会いし、いろいろ話をしました。山村さんは「日本の南洋群島統治時代に教えてもらった『教育勅語』を我々は憶えています。『・・・父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持ち、博愛衆に及ぼし、学を修め、業を習い、以って知能を啓発し、・・・』を。このような人間が生きていく上で大切な規範が日本にはあるのに、今の日本はどうなっているのですか？特に若者は自由を履き違え何故勝手なことをするのでしょうか？」と言われました。私共の日本出発直前、たまたま起きた日本赤軍ゲリラによるクアラ・ルンプール事件があった直後だったからです。

歓迎会では、住民の歌は殆ど日本語の軍歌、私共も一緒に合唱しましたが、忘れてしまっている3番、4番、5番・・・と続き、ハーモニーよろしく歓迎会が楽しく盛り上がりしました。また山村さんは「文芸春秋」を毎月日本から取り寄せ、いつも愛読しておられたようです。敬意を払うと共に、深い感銘を受けました。

昭和54年（1979年）8月、マジュロから山村ご夫妻一行14人が鹿児島経由（山村氏の父は鹿児島がご出身と聞いています）で来日、約1ヶ月にわたり知人訪問、観光、見学などをされました。東京の幹事役員が交代でご案内し、楽しかったことを思い出します。

日本遺族会主催の現地慰霊・友好親善訪問団にも私は参加させていただきましたが、その際、ご多忙の山村さんにお会いできないと思っていたところ、最終の帰国出発日マジュロ空港に山村さんがわざわざ見送りに来られ、再会を果たし涙が出るほど嬉しかったことを思い出します。山村さんは本当に優しい方だったのですね。

山村要さんは、マーシャル諸島共和国

の独立にも尽力され、またマーシャル方面遺族会との慰霊、親善交流にも大変ご協力をいただきました。まさに公私共に要（かなめ）となった方と思います。心からご冥福をお祈りいたしますとともに、マーシャル方面遺族会としても現地慰霊と共に、両国の友好親善が更に関われれば、山村要さんのご恩に報いることになるのではないかと考えられます。

合掌

●ご参考

皆様ご承知の「当遺族会ホームページ」をパソコンでご覧になると、遺族会の「本部だより」、その前身「環礁」が関係資料とともに収められており、当時の日本の様子の記述も多くあり、大変貴重と思われれます。この追悼文中の昭和50年現地慰霊（環礁・24号）、昭和54年山村ご夫妻一行日本訪問（環礁・32号）についての記事も出ています。

山村要さんの女婿がマーシャル諸島共和国の3代目大統領、カサイ・ノート氏で、その娘さんが現在の同国日本公使アネットN・ノートさんです。

第二次世界大戦 私の戦争過去帳

連載① 未だに多くの戦友が眠る飢餓の孤島

マーシャル群島

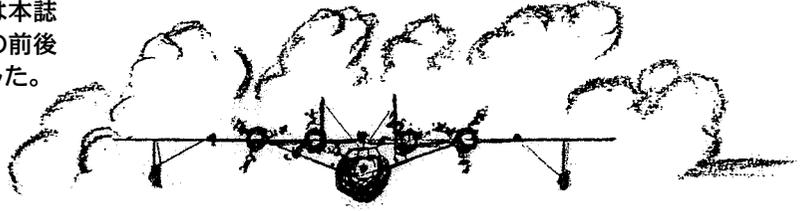
ウオツゼ島

■筆者
吉田誠さん

(平成24年7月2日91歳で逝去)

総てが忘れないうちに克明に。
戦友は多く眠る。
戦争は勇ましい反面、
悲惨である。忠実に記す。

●大井和子さん（東京都）より本誌 28 号に掲載した鈴木千春さんの質問に答えて、吉田誠さんの手書き手記が届けられました。その貴重な手記を連載で発表させて戴きます。厳しい戦闘の舞台となったウオツゼ島です。手記中の残酷な場面は本誌の編集方針から割愛し、全文の前後を入れ替えて読みやすくしました。



川西式九七式飛行艇（筆者画）

ウオツゼは、周囲 100 km で本島は周囲 6 km である。当時としては平和郷そのものの楽園であった。第一次大戦（大正 3 年〜7 年）で日本の委任統治となり、教育は日本語のほか現地のカタログ語であり、ウオツゼ環礁オリメルチ島にはオリメルチ公学校があった。

島民の中にはドイツ系とスペイン系が少数住んでいたし、第一次大戦で日本の駆逐艦に追われて横転していたドイツの駆逐艦がオリメルチの外海に横になっていた。

当時のオリメルチ村長はトレインさんで、月給が 14 円だったと思う。私は 8 円 70 銭だった。島での産物は椰子で、主にコプラ（石鹼の材料）、タコの木（大きな実で焼くとサツマイモのようで美味しかった）、パイア、マンゴスチン、モンキーバナナ、マゴモック等である。

動物は約 30 cm の青と黒色のトカゲ、サソリ、椰子ガニ等で離島にはジャングルを飛んでいたニワトリもいた。海産物ではアジ、イワシ、ボラ、サワラ、タコ、ウツボその他が多かったが、美しい色の名の知れぬ諸々の魚も見られた。

イワシなどは焼いても煮てもひどいジンマシンになってしまったし、美しい熱帯魚を食べた看護兵 4 名が死んでいる。原住民は採った魚は浜辺に置いてハエが止まったら大丈夫と言っていた。昔からの言い伝えかも知れない。

ところで当地が平和な頃は私主計兵に對し、「主計兵が兵隊ならば軍艦マストに花が咲く」と言われたもので、平時、戦時を問わず総ての食糧品、需品、衣服、庶務会計と多くに関与した。会社で言うなら総務関係である。

最上川丸でウオツゼに

昭和 17 年 7 月 〇 日、仮入隊の第二海兵団から単身バスで横須賀駅に向かった。天気の良い日で三浦教官と石川三主曹が門営まで見送りしてくれた。駅から歩いて 2、3 分のところが逸見の波止場であり、転勤証明書を衛兵室に提出して指定された最上川丸に衣囊を背負って乗船。

この船は貨物船で、七千トンとの事で徴用船であった。他に一名の転勤者（機関兵）と二名のみであった。早速二人で

船長室に行き、挨拶を済ませて居住区に戻った。クエゼリン環礁のルオットからトラック島に行くとの事であった。機関兵の彼はギルバート諸島のタラワ(玉砕)に行くとのことであった。

海軍軍人は二名のみで船倉には多くの工員が乗船し、軍用トラック、航空燃料ドラム缶が多く積まれ、徴用工員は船倉でゴザを敷いて100名以上いたようである。後甲板に新品の零戦2機が積まれていた。ルオット行きとのことだった。

出航したのが多分正午頃で好天気だった。やがて横須賀軍港を後に左に千葉の鋸山も見られ、一路外海にこの船は単船航行となった。東京湾を出てから一路南へと進路。船長から海軍さん二人で交代に見張りするように指示を受けた。

一昨日出航した貨物船は、雷撃により沈没したと言われた。翌朝海の色が変わって来た。美しい青海原となって来たこの時、トビウオが多く波間を飛んでいた。100m位飛ぶようである。やがて小笠原付近らしく右側にウラナスカ岩礁がみられた。船員はこれがコースだと言っていたのを覚えている。この頃になると船

内は暑く、甲板で涼むようになった。船倉の徴用工員達も甲板に出て来た。

約10日間程度の航海であったと思うが、何事もなく無事に遠くに平らな島が迫って来た。やがて飛行機が一機旋回、本船の上空に見えた。急に波も静かになり、水道を通過して内海に入った。平らな島はクエゼリン環礁であった。クエゼリン本島には止まらず、環礁内にあるルオット島で錨を降ろした。

ルオットには海軍航空基地があり、我々二名のみ下船した。上陸早々宿舎に案内され、旅装を解いた。見るもの総てが珍しいものばかりだった。椰子が多く林立し空が実に澄んで美しかった。最上川丸は後日トラック島に向けて出港し、航行中雷撃を受けて沈没する。多くの乗員はどうなったのか？

各自ルオットを出発す

約10日間の航海もルオット上陸の翌日一緒であった機関兵は転動してしまっただ。当時輸送機として使用していた川西式九七式大型飛行艇(最高速度380km

／h)で南の空に消え去った。転動先はタラワであった。然し昭和19年春には玉砕している。彼も戦死してしまっただ事だろう。

私は裸になり横になった。その時体が急に冷たく感じたらカメレオンであった。天井にへばりついてから急降下して来たらしい。目が丸くて大きく、口も大きい、何の害も加える事なく可愛い動物で、約10cm程度であった。現在ペットショップで販売したら人気者になったかも知れない。

当日当番兵が来て明朝ウオッセ行便あり、乗船するよう連絡があった。ルオットでは椰子の水を大分飲んだが、ラムネの味に近く懐かしかった。明朝出発なので夕食をとってから一人用の蚊帳に納まってゆっくりした。それにしても南洋は暑いと思っていたが、意外にそれ程暑くなかった。

ルオットからウオッセに

彼はタラワに、私も早朝ルオットからダグボートに非ず小さな漁船に乗ってウ

オッセ島に向かった。ウオッセに行く者は私のみであったが、実に立派な豪華船であった。多分5、6トンもあろうか。小さなポンポン船で、東京築地〇〇丸と記名してあった。乗員は日本人船長とほかの5、6名は総てカナカ族であった。前甲板に2個の箱の中にニワトリが、後甲板には豚が2頭と実に楽しいポンポン船であった。

ウオッセ着の夕刻まで外海で大きく揺れた。原住民が2mはある大きなサワラを釣り上げたようで、彼らは棍棒で頭を叩き、調理する前に肝を取り、海中に投げた後、各々が座して口々に何か唱えて手を合わせていた。多分宗教的なものだったと思った時に甲板のニワトリが時の声を張り上げた。

夕暮れ近くウオッセ島のトートン水道を通過し、30分後に警備隊棧橋に接岸した。電報か何かで知ったのか、私の転勤に一名の陸戦隊員が待っていてくれた。約10分程度歩いたところで「第六十四隊本部」と書かれた大きな看板と共に2名の立哨兵に転勤報告をし、やがて本部主計長室に案内された。

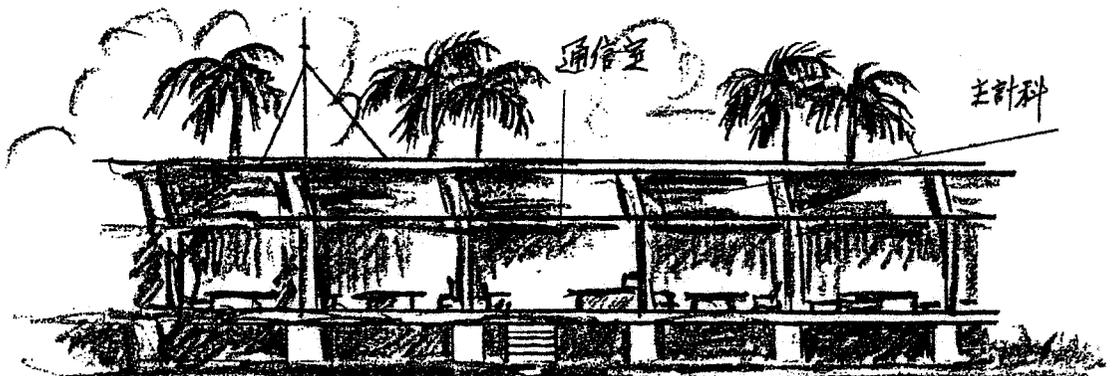
第六十四警備隊

本部で主計長に転勤命令書を提出す。海軍主計大尉、北島秀治郎及び分隊長土青木正（海軍主計兵曹長）主計科主任、岡本武夫（海軍一等主計兵曹）等に到着報告をしてから第三種軍装（一般作業服）に着用する。炊事関係、糧食庫、冷蔵庫、被服室、需品庫及び主計科庶務室であった。当日夕暮れ近く、青い空だのに一本の白い糸が目に映った。あれは昼の流れ星だと聞かされた。嘘だと思ったが、Sky Blueの言葉通り、澄んだ空だから出来る現象と思った。

その後は連日戦斗配食とかその他が主であった。武装は九九式小銃（7・7mm）と十四年式拳銃であった。この頃のウオッセは平和そのものの時期であった。朝方3時頃には輝いていた南十字星は、太陽の昇る以前に水平線に消えた。

昭和17年10月小機動部隊

毎日が平和郷であったウオッセに突如



第六十四隊本部（筆者画）

として午前中に小部隊による空襲があった。電波探知機（本島北部、南部）2か所から敵機らしき映像有で、サイレンが全島に亘り鳴ったと思ったら、敵機約20機程度が一機ごとに滑走路（1、450m）に対し、250kg爆弾及び機銃掃射を行って来た。攻撃時間は意外と短く、大きな爆弾の穴をあけて去って行った。

米軍機は主にグラマンFと4F戦闘機、TBF艦上爆撃機。人的被害はなく、航空機不在でなし。その後施設部隊〇〇技術大尉指揮下のアラン隊（朝鮮半島から徴用）約300名により以後修復された。当時都度電信室には第四特拠部隊から滑走路修理され度し（机上作戦）そのもの。当時からある上級将校は行動をせず。まったく現在と同じ。

援軍来島

小機動部隊が去り、再び平和な島が戻った頃、多くの輸送船が来島した。殆どの部隊は補充兵部隊で、約200名の陸軍部隊で、満州からの塚部隊及びフィリピンから転進して来た約100名の高橋

部隊であった。この部隊は総て現役の強力部隊であった。海軍では各鎮守府から補充兵部隊が来島した島の中央部から南区椰子林にテントが張られた。上空からは実に良き目標となるのに当時の高官は一体解らなかつたのか。皆して話したことである。

夜になると点呼（陸軍）、整列（海軍）といずれも気合を入れるのであり、陸軍は戦地でもビンタ、海軍では精神バットある。海軍の補充兵は子供、奥さんの居られる方々が多く、皮肉にも当地ではこの方々の殆どが帰らぬ人となっている。整列が終わると私のところに多くの新兵さんが来て頂き、故郷の話、妻、子供の話と花が咲いた。中には抱きしめていた奥さんや子供の写真も見せていた。その頃から食糧に関する問題が出て来た。

B24による本格的編隊爆撃

昭和18年も終り頃だったと思う。探知機による空襲警報あり。上空には2機の大型機が高高度でクロスする飛行で飛び去って行った。

つづく



米軍小部隊空襲（筆者画） 1機も落とせなかつた

「飢餓の孤島、マーシャル 群島ウオツゼ島」を読んで

鈴木千春
(東京都)

「戦争は常に得る事なく、人間は所詮動物にすぎない。常に動物の勢力争いそのものである」という言葉で手記ははじまります。昨年ご逝去された海軍一等主

計兵曹の「吉田誠」氏の残した手記を拝読しました。整然とした手書き文字、プロ顔負けの見事なスケッチ、島内の地図など、丁寧に「記憶」を残そうとした筆者の真摯さが伝わってきました。

主計兵としてウオツゼ島に着任した筆者は、食糧、需品、庶務会計と、会社でいえば「総務関係」。だからこそ見えてくる島の飢餓の様子が描かれています。例えば「戦闘配食」の変化、当時の主食、米1日720gだったのが、280gに減量され、最後には「おちよこ1杯」になったこと。島内には、木に寄りかかったままの餓死者、食糧窃盗の罪で木に縛られたままの遺体、銃を持って伏せたま

まの遺体、滑走路の下の白骨化した遺体など、遺族にとっては読むのが辛い描写も多くありました。

昭和18年10月まで「平和郷」だったウオツゼは、突如として激しい空襲を受けます。それまでは、陸海軍ともに増兵され、士気旺盛、夜になると「気合い入れ」がはじまり、陸軍は「点呼」と称して「ピント」、海軍は「整列」と称して「精神バット」で殴られていたそうです。

マキン・タラワが玉砕し、敵はマーシャル群島に連日連夜、雨のように爆撃を加えます。島の各砲台は果敢に応戦するも、警備隊の戦死傷者は増加の一途。「世界最高の訓練を受けた陸戦隊もこの物量攻撃にはどうにもならん」と吉見司令の言葉。敵の爆撃は正確で滑走路、兵舎、食糧庫すべて直撃され、司令の乗用車が吹っ飛び、影も形もなくなった等の記述がありました。私は昨年、慰霊に行ったルオット島の司令部跡やトーチカなど戦跡の惨状を目にしましたが、「人間が蒸発するほどの爆撃」がどれほどのものだったかと身震いしました。

「昭和18年11月9日以降、食糧すべて

爆撃でなくなり、ゼロとなる」しかしトラック島の第4根拠地隊からは「滑走路を至急修理せよ」の電文が届くのみ。「食なくして戦えるか！」と筆者の苦悩が書かれています。

当初、米軍上陸の第一目標はウオツゼ島でしたが、強固な戦車防壁があるため、クエゼリンに変更し、19年2月、クエゼリンとルオットが玉砕しました。そして、残ったウオツゼ島の兵は終戦まで、島にある雑草、ネズミも食べ尽くし、デング熱、アメーバ赤痢に苦しみ、逃亡、投降、餓死者続出の「地獄」で彷徨いました。

その「地獄」を経験した筆者は、手記の最後に「若い勇士が國に命を捧げた、少しは現代人も考えろ」「現代の社会は『甘え』と『墮落』だ」と訴えています。「飽食の時代」に生きる私は、この手記を胸に刻み、後世に伝えようと思えました。筆者がご存命中に是非お会いしたかったと残念でなりません。

「爆撃」と「飢餓」の島で亡くなった戦没者の無念さを思うと、冒頭の「戦争は常に得る事なく・・・」の言葉が胸に刺さる手記でした。

訃報

●平成25年6月

山村要さん（篤志会員）

山村さんと私の直接の出会い、平成11年6月でした。確か菌の治療と墓参で来日中に、故書間副会長と共に九段会館で面会しました。それ以前はお名前やお顔は知っていましたが、お話をするほどの機会はありませんでした。

在日予定中、東海道線、二の宮駅近くに従弟がいて墓参の帰りにそこに行くというところで私達もお邪魔することになりました。山村さんは温厚で親切な方で、細かいところまで気配りをして迎えて戴きました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、ご存知の方もいらつしやると思います。そのかわり従弟の方が通訳よろしくいろいろと代弁してくれました。

現地の言葉も日本語も堪能で、当会にとつても頼りにしていたのですが、昨年の突然の訃報を受けて大変残念です。

心よりお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

黒川誠
昨年6月26日、マーシャル諸島共和国

平成26年度～27年度行事予定表

年	月	日	曜	開始時間	場 所	行 事
26	1	2	水		靖国神社	平成27年度慰霊祭の申し込み
					靖国会館	平成27年度総会・直会・会場の申し込み
		19	日	12時	スクエア荏原	本部だより29号の発送他
26	3	16	日	12時	スクエア荏原	平成26年度慰霊祭の準備会議他
		5	土		靖国神社	平成26年度慰霊祭・総会・直会
		22	火		靖国神社	春季例大祭当日祭
26	5	18	日	12時	スクエア荏原	本部だより30号の編集会議
						千鳥ヶ淵墓苑拝礼式（期日未定）
26	6	15	日	12時	スクエア荏原	本部だより30号の校正他
26	7	15	日	午後2時	靖国神社	永代神楽祭命日祭（マーシャル方面遺族会）
		20	日	12時	スクエア荏原	本部だより30号の発送他
26	8	15	金		日本武道館	全国戦没者追悼式
					文京ホール	東京都戦没者追悼式
26	9	14	日	12時	スクエア荏原	本部だより31号の編集会議
		19	日	12時	スクエア荏原	本部だより31号の校正
26	10	18	土		靖国神社	秋季例大祭
						沖縄戦没者追悼式（東京都遺族連合会）
26	11					本会主催現地慰霊巡拝実施予定
27	1	2	金		靖国神社	平成28年度慰霊祭の申し込み
					靖国神社	平成28年度総会・直会・会場の申し込み
		18	日	12時	スクエア荏原	本部だより31号の発送
27	3	15	日	12時	スクエア荏原	平成27年度慰霊祭の準備会議
27	4	5	日		靖国神社	平成27年度慰霊祭・総会・直会

日本大使館にお孫さんのアネットN.ノート公使を訪問し、お悔やみを申し上げます（写真12ページ）。山村さんには10名のお子さんと、56名のお孫さんがいらっしゃるそうです。平成26年の慰霊祭に公使をご招待したいと申し上げたところ快くご承諾戴きました。

◆当会の役員会会議室として長年借用していましたが「平塚橋会館」が閉鎖改装されることとなり、幸い近所に新設なった「スクエア荏原」3階第5小会議室を借用出来ることとなりました。

◆東京都品川区荏原4丁目5番28号
 ◇☎03・5788・5321



●追悼文関連 山村要さんと黒川会長。壁の写真はカサイ・ノート大統領 注：撮影場所年月日不明



●追悼文関連 山村さんとマジュロの一行（昭和 54 年 8 月 27 日 NHK 本社を見学時）



入選作掲示版の前での星野綾子さん（靖国神社境内）



アネット N・ノート公使（山村要さんのお孫さん）